

會



報

1953年7月

168

日本山岳會

七七五〇mに日章旗

マナスルウ隊からの報告

四月十三日サマのBCに着いた三田隊長以下の一行はC1・C2・C3と順次天幕を進め、四月廿日C4（前進根據地）をナイケ・コル（五六〇〇m）に設置。次いでC4を強化する一方問題のアイスフォールを突破、途中五月五日C5（六〇〇〇m）同九日C6（六一〇〇〇m）同十一日C7（六六〇〇m）と進んで、五月十五日遂に七一〇〇mのノースコルにC8を設置し、十九日第一回のアタックが加藤（喜）・山田兩君によって試みられた。併しこの日は深雪のため七四〇〇mに達した時は既に午後三時で、兩君は同所に雪洞を掘ってビザクし、更に翌日の登攀を計畫したが夜半から天候が崩れたため、一旦攻撃を中止し全員C4に下った。

五月廿五日、天候回復し、第二次のアタックが開始された。五月廿一日加藤喜・山田・石坂の三君は山崎君以下のサポート隊と共にC8を發し、七五〇〇mにC9を設置し、六月一日頂上にせまつたが遂に七七五〇mを最高到達點として引返さざるを得なかつた。會は六月十六日夜半右の入電に接し、更に三田隊長からの正式報告を得たので、六月十九日の毎日新聞紙上に會長の名を以て挨拶をかけた。

榮冠遂に逸す

サマのBCにて

三田 幸夫

一行は六月八日サマのBCを發しマルシャンディからボカラ經由でカトマンズに歸着する。本會報告が會員各位の御手許に届く頃は、一行が再び元氣な姿で我々にまみえ、數多くの土産話と素晴らしい寫眞がもたらされる筈である。

(M)

五月廿七日頃からBCに於ける小生の心持は實に堪らないものであつた。毎日午前中は快晴で、マナスルウは實に良く見える。隊のスケジュールは、廿九日がプラトウへ登る日。この登路はBCから明瞭に見える部分なのだ。スラブがかなり露出した急な斜面で、豫定路はその一部分の細い雪の斜面の筈。廿九日が待ちきれないで廿八日から十八倍の望遠鏡を固定して注意した。パンシや通譯、ポーター達にも人影を見付けた者に對し懸賞を出した。傍にはボール紙のマナスルウのスケッチを置いて發見地點を書き入れるようにした。

廿九日も午前中は快晴。近頃毎日朝は五時半には起きてしまう。例によつて望遠鏡にかじりつくが、さつぱり見えない。眼がちらついてくる。首が痛くなる。午後は決つたように風が出て雲はマナスルウを蔽つてしまふ。夕方時々雲の割目からプラトウが見えることがある。プラトウから登つた直ぐの處は蒼水で、西日にギラギラ輝いて物凄く。あの氷の状態が頂上迄續くものとしたら敵わないだろう。

登頂豫定日の廿日も同様。何も見えない。上からの報告もない。ラデオは毎日のようにベンガル灣アンダマン島方面のモンスーン發生を傳える。氣が氣ではないが午前中だけは決つて快晴だ。然し上の方の風は強いらしい。マナスルウの裏側から屢々非常なスピードの雪煙が昇つてくる。ビナグルとプラトウの間の凹みの斜面には、よく頂上方面から恐ろしいスピードの雪煙が氷の斜面を駆け下りてくる。人間が立つていられぬ程度のものであないか？

午後四時頃、丁度お茶を済ました頃、竹節・依田の兩君が眞黒に焼けた顔を食堂の入口に現わした。廿九日迄のC8の様子が漸く解つた。然し竹節君の話では、その歸路屢々の望遠鏡の観測に拘わらずC8からプラトウへ向う人影は見られなかつたという。我々の頭の中に焦慮の色が益々濃くなつて来る。燃料や食料の問題が氣になつてくる。竹節君の話では燃料の逼迫は相當のものらしい。これが潤滑は先ず生命線を断ち切られるに等しい。未だ元氣旺盛と聞く若い隊員達のことか可哀相にならぬ。何とかならないだろうか？

らぬ。頂上迄の様子は全然解らないのだ。

廿一日が来た。望遠鏡の観測は同様の結果。悲觀の色益々濃くなる。この晩C4から村山のレポーターが届く。小生の廿日附の手紙への返事だ。これによると

「攻撃隊は昨日、烈風のためC8から行動出来ず、廿一日プラトウへ登るの期限ならぬ。C9建設は不可能の模様、即ち登頂は絶望の如し。」

これはC7泰安發の報告に基づくものだ。絶望感にぶちのめされた思いだ。未だ何も知らぬ竹節君にこの話をするのは誠に辛かつた。二人で色々話し合つた。が此處ではどうにもならないことだ。食事の時合せるお互の顔にも生氣がないような氣がする。ベリス・キヤンプ建設以來の四十餘日の忘れられた皆の苦勞が思い返えされる。漸くC8の建設迄溜まつたのに。豫定の最後の日は既に今日となり食糧、燃料の残量は餘りにぎりぎりらしい。一刻も早く現狀を知りたいが此處ではどうにもならぬ。

焦慮の内に迎えた二日の午後二時半、突然科學班の中尾・川喜田の兩君がラルキヤ峠を越えて此處へ着いた。そして二人から意外な報告を聞いた。前日の一日午後二時頃、プラトウの上からノースコルへ下りようとする三人の人影を發見したというのだ。彼等の望遠鏡を通しての廿一日、一日に亘る觀察は突然我々に新しい光明を与えてくれた。彼等は登頂したものだと思つたらしい。

四時のお茶をすまして暫らくす

とC4への荷上げのボーターが歸つて来た。そして二人のサヒーブが下りて来るという。どうも誰だか解らぬ。その内五時近くなつて上からヤッホーの聲が聞える。待ちきれないで河原迄迎えに行こうと出かける、入れ違ひに左のブッシュの中から「三田さん！」と聲をかけた。攻撃隊の加藤喜一と山田の二名だった。ひどく焼けた二人は大きなリュックサックを背負つて、然し頗る元氣相だった。「頂上は駄目でしたよ」という。握手をする自分も胸が一杯になる。竹節・依田・中尾・川喜田・ペンシが集まつて来る。熱いお茶とオムレツを喰ひ乍らの二人から報告を聞く。卅一日はプラトウの氷上にC9を建設、一日は七七五〇米迄到達しC7に引上げ今日は一気に此處迄飛ばして来たのだ。六貫程の荷物を各々擔いで淡々とした顔を見せた彼らの馬力振りには、只敬服の外はない。頂上は逸したがプラトウから先の登路を発見した功績は、今度の遠征にとつて誠に恥しからぬ成果だ。エヴェレスト、K2、アンナプルナを除く八千米級の最高到達地点の内最高に属するものではないなからうか。そしてマナスルウへの次の挑戦に對して、登頂の決定的確信を與えてくれた。簡單な今日の報告を山田に書いて貰つたから此處に添付する。

は、呉々も残念だが、小生としては此の成果は我々として最善を盡しての結果として、心からの満足を感じている次第である。此處で一應登攀は終つた譯だが最後に今日迄此の遠征隊が唯一の行動に支障を及ぼすような病人、怪我人を出さなかつたこと、又アシデントを起さなかつたことは、實に幸いであつたとつくづく感じている。そして八日此處を出發、ボカラを経てカトマンズへの無事な旅が續けられんことを祈つてゐる。(六月五日)

攻撃隊の報告

山田 二郎

五月三十一日 快晴

一昨日夜以來C8をなやまし、再び前回攻撃の時と同じ氣象状態の再来かと吾々を落膽させていた強烈な西風(風速約十米)も、三十日午後からは次第におさまつてきた。

今日はまだ風は残つてゐるが、これはC8の位するノースコルという地形的な影響に因るものであるらしく、頂上プラトー附近の雪烟は殆んど認められない。

この絶好の機会を掴んで、一舉に頂上攻撃に向うべき豫定の計畫に従ひ、加藤喜、山田、石坂の三名は、山崎、Gundi、Lakpa、Antemba、Migmasita、Angnorb

の六名のサポーターの下に、二日分の裝備・食料等總重量約五〇瓩を持つて、朝九時三〇分C8を出發した。

雪質は今回は前回の攻撃時と全く異り、ラッセルもくるぶしを没

する程度であり、又サポーターのメンバーも攻撃隊員も大いに高度馴化したせいもあり、行程は非常にほかどり、忽ちにして前回C9(雪洞)を建設した地點(高度七二〇〇m)に達し更に前進する。この附近から風は殆んど無くなり、至極好調にはなつてきたが、一方岩峰に近付いたため、雪層(これは日本では考えられないことだが、雪面から地表面迄殆んど単一の層)と思える程、均一の雪質をなしている)の厚さが減り、所によつては數十種の雪の下にスラブが現われ、荷を負つたシェルバには危険を感じるようになる。斜面の平均傾斜約五〇度となり危険を感じたため、登路のラッセルをシェルバに代り隊員が擔當、最後のクラスト斜面を登り、固定網を下ろして、これに依りシェルバを登らせようとした所、これより僅かに早く、シェルバの一人が滑落、これに引きずられグンディも數米を滑落したが、グンディの奮闘に依り辛うじて停止し事無きを得、一四時四〇分プラトー西端の岩峰東端高度七五〇〇mの地點にC9を建設することが出来た。此所にウィンパー改良型二人用天幕一張を作り、前記三隊員が留りサポーター隊は山崎引率の下に同一ルートC8に下つた。

この頃から天候は例の如く積亂雲が発生し、これに伴ひ約6mの西風と若干の降霰、雷があり、気温も一八時にはマイナス二五度Cであつたが、夜に入り再び静穏。風も殆どなくなり、夜間の最低気温はマイナス三二度Cに迄降下した。絶好の攻撃前夜であつた。

夕食にはアルファ米の「みそ雑炊」が美味であつたが、石坂は僅かながら吐き氣を催したようである。この夜加藤、石坂は睡眠不足氣味であつた。これは二人用天幕に三人入つたため窮屈であつたのが原因かも知れない。

六月一日 快晴

昨日に勝る快晴、遙かに望まれるチベットの山々も薄青くかすみ日本の春山を思わせる安定した空模様である。

四時半起床。オバルチン、アルファ米(前夜と同じ炊事法)オート・ミールに腹ごしらえをしたが石坂は昨夜の不眠が可成り影響したようである。

午前七時、山田、石坂、加藤の順にてアンザイレノC9を出發したが、天幕前から直ちに全くの著氷の斜面が續き、加藤、山田のビッグルの石突きは全く物の用にたゞ、僅かに新品のアイゼンの爪だけが頼りといった状態で、初めて出くわすヒマラヤの著氷に眼を瞭る。従つて携行した標識用赤旗も立てる所無く、所々に僅かの氷の隙間を見つけたはそこに赤旗をさし込みつゝ進んだ。

初めて眺めるプラトー上は(毎度のこと乍ら)意想外に廣大であり、頂上迄約三つの段階に分れ、各ステップの間は前記の如き著氷又は著氷上を僅かに蔽つたスラブの原となつてゐると云つてよく又到る所幅は大きくはないが、クレバスが縦横に走つてゐる。

午後九時半、第二のステップの直下に達する。此處はC8上の氷瀑の東側の斜面を登つても達せられる所であり、このルートによる

ならばプラトー上の距離をかなり短縮出来るものと思はれる。但しC8から如何にして此處迄直接に達するか、此の爲にはC8の位置を何處にしたら良いか等々、問題はまだ残された儘ではあるが。

第二のステップの登りは、スラブと粉雪の混つた斜面で、ラッセルに苦しむ。歩行速度は正確に測らなかつたのだが、二乃至三呼吸に一步程度で、前回初めてC7に登つた時とさして變化ないのは驚ろくべきことであつた。

この頃から西方に積亂雲、チベット方面にこれの變化したものと思はれる巻雲が流れ始め、プラトー西南端リッヂに雪烟が昇り始めて来た。頂上は依然として仲々近付く様子もなく、吾々を無慈悲に眺め下ろしている。

午前十二時、第二のステップを越し第三のステップにかゝる少々手前、高度七七五〇m(携帶アネロイド高度計による)に達し休憩、歸路に要する時間、隊員の健康、疲労の状態、天候の變化を考慮し遂に同地點より引返すことに決定した。

同地點から頂上迄は片道更に五時間を要するものと思はれるが、技術的には頂上への最後の五〇m程のスノー(アイス?)リッヂを除けば、さして困難でないルートが著氷を避け續いてゐるように見えた。

今回の最高到達點附近にはキャンプ地も求められる狀況よりして私見よりすれば、プラトー上に更につつC10を設置(二人用)することにより、必ずや頂上に立つことは可能であらう。何となれば、

①頂上へのルートには此の先技術的にさして困難はないと思われること。

②當時の状況よりして充分に高度馴化した隊員が、プラトリー上に更に一夜を重ね、翌日のアルパイトは可能と思われたこと。

③C10豫定地より頂上迄の所要時間は、前記の如く往復八時間以内に見られること。

十二時、引返し地點にて寫眞撮影、國旗埋没(アイスピートにて固定)往路の赤旗を慎重に辿り、十四時C9に到着、天幕を整理し各人携行し得る限り荷を持ったが天幕のみは残さざるを得なかつた。

十四時四〇分同キャンプ後、昨日固定網を作った所に同じく四〇mのザイルを固定し、山田、石坂、加藤の順にて確保しつゝ約一五〇mを下降したが、この雪面は昨日とは異り雪量が著しく減少、確保のためのビッケルも半分位しか入らぬ所があり、又雪も腐つてしまったため大いに難澁し、僅か一五〇mを下降するに一時間半を要した状態であつた。

前回の雪洞建設時、昨日の登高時、それに本日と夫々雪(斜面)の状態は全く異つてゐることを考えると、このルートが恒久的にして安全なるものであるか否か再検討の要がある。

この危険な雪面を通過し了る頃C8に在った山崎等は吾々の撤収に氣付き、直ちに應援のため、山崎、アンテンバ、ミンマシタ、グンディ、四名にて登つて来てくれ第8、第9両キャンプの中間附近で合流し、共にC8に至る。C8

到着十七時五十分。

此所に於てC8は天幕少く收容不能のため更に同キャンプ十八時十五分發、十八時五十分C7に着き高木登攀隊長等に状況報告、C7に一夜を明すこととなつた。

科學班登攀隊を發見

川喜田 二郎

ネパールの西部へ大迂廻した科學班は轉じて東に行進し、巡禮の聖所として有名なムチナートから五〇〇〇mに餘る高い峠をこえアンナプルナ連山の北方を経て、マルスルウの西側に近づいた。そして昨年の偵察隊と同じコースでラルキヤ峠を越えてサマのBCに至るべく、マルシヤンディ河流域の源流にある寒村ビムタコーチに着いたのが五月廿日だつた。この村はマナスルウの西北八哩位に當り、高さは三六〇〇m餘、すでに森林限界に近い。

翌廿一日朝六時頃、中尾は双眼鏡でノースコルに天幕らしい黒點を認めたが、遠くではつきり判らなかつた。ついで九時四十分頃、川喜田は四、五人の隊員をノースコル附近に發見した。彼らはノースコルのマナスルウ寄りから降りて来たように思われたが、その點はつきりしなかつた。やがてノースコルのかくれた彼方から、また四―五名のパーティが現われて合流した。

忽ち我々のキャンプでは大騒ぎして代る代る双眼鏡でこの劇的な光景を夢中で眺めた。この頃のお天気はきまつて午前中が快晴、午後天候が崩れるのであつたが、こ

の日も御多聞に洩れなかつた。それで吾々の眼前にはノースコルからマナスルウ主峯、更に西へ張り出した大尾根と氷壁がおし氣もななく展開してゐたのである。

合して九人となつた登攀隊は、それからマナスルウ北尾根の大斜面を登り出した。この大斜面の東寄りには急峻な氷河で、西寄りは雪が少なく所々に岩が露出し、最上部は黒々と岩壁で終つてゐる。登攀隊は氷河をさけて西寄りを登つてゐた。我々が最後にこの一行を見たのは十二時で、その時この急な大斜面の八割(ノースコルから岩壁上部の臺地の縁までの間の)まで登りつめてゐた。そしてあつという間もなく雲がおしよせ我々の視界を去つたのである。

この日高山帯のお花畑でキャンプした我々は、翌六月一日いよいよラルキヤ越えをした。この道筋の殆どは、他の山が邪魔になつてマナスルウは見えない。中尾は、もしや今日の夕方に本隊のBCに着けるかもしれないからというので、一行を誘導するために双眼鏡をもつて先發した。これはBCがサマ以外にもうひとつ候補地をもつてゐたからである。マナスルウ氷河の一分枝がサマの上流ラルキヤの近くへ谷を作つて流れ出てゐる、その谷の奥がそれである。そしてこの谷を見透して、吾々の今日のコースからも再びマナスルウが見える。

中尾はこの谷に少し入つて本隊のBCがこゝにはないのを確かめた後、後發の一行を待つ間、双眼鏡でマナスルウを眺めてゐた。十四時頃、ノースコルの上の大斜面

の最上部に當る岩壁の上(更に上部のテラスの下端)に、黒點が三つ現われそれはこの急峻な岩壁上端と、そのすぐ東の急な氷河舌端との境目の邊を下り出した。

また同時にノースコルからナイケのニルへかけてのアイズ・フォールのほと中程で、十數人の人影がものゝ一時間も上りも下りもせず一ヶ所で右し左ししてゐた。それは何か非常な困難があつて途方に暮れてゐるかの如き感を與えた。

この日は午後にも拘らず比較的に天候に恵まれたようであつた。午後五時頃でもなおマナスルウのノースコル以上は、悠容たるその姿を下界の雲の上にあらわして、夕陽を浴びてゐた。

いた後次のことを知つた。中尾が見たあの三人の人影は、頂上間近までアタックした加藤、山田、石坂の三隊員がC9から降つてくる最も劇的な一場面なのであつた。

全員無事歸國の途へ

遠征隊員は三田隊長以下全員無事ボカラよりカトマンズ經由でカルカッタに集結、第一陣は竹節、辰沼、依田、山崎、石坂の五氏が十六日十八時半羽田に到着、十七日夜日本工業俱樂部で報告會を開催。第二陣高木、村木、加藤(喜)山田の四氏は廿一日未明羽田着、また第三陣三田、田口、加藤、の三氏は廿四日夕羽田に到着。殘留の村山、中尾、川喜田三氏は稍遅れて歸國する。

登山用具の専門店

好日山莊

プライスリスト進呈

東京店 海野治良
中央区銀座西二ノ五 電話東京(56)3600
大阪店 西岡一雄
北區堂ビル前協和銀行三階
神戸店 島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一



エヴェレスト——登頂
1953年英國登山隊

イギリスの一九五三年ブリ・モ
ンソンのエヴェレスト登山隊（隊
長ジョン・ハント大佐）のヒラリ
ーとシェルパのテンシンとは五月
二十九日頂上に到達した後全隊員
とシェルパたちは無事エヴェレス
トを去った。

隊員

John Hunt (42)
Thomas D. Bourdillon (29)
Alfred Gregory (40)
Edmond P. Hillary (34)
George Lowe (28)
Major Charles Wylie (33)
George C. Band (24)
C. Wilfred Noyce (35)
Mickael Westmacott (28)
Dr. R. Charles Evans (34)
Dr. Michael Ward (28)
T. Stobart (35)
(カックの中は年齢——平均年
齢三二・五)

ヒラリー（ニューギニア島の
ビー・フアマ）ポアディエン、
ワードの三人は一九五一年のエヴ
レスト遠征に加った（山岳第
四六・七年ヒマラヤン・ノーツ参
照）。ハント、ワイリ、ノイス、
エヴァンズ、ストバートいずれも

ヒマラヤの山々に親しんだ人々。
一九五二年のチョ・オニにはポア
ディエン、エヴァンズが参加。

行程

2月12日・本隊ロンドン發（船）
3月3日・ハント隊長（病氣のた
め出發がおくれた）カトマンズ
着（空路）本隊に合す
3月10日・Nanche Bazar 着
3月26日・Thyangbocheの隣接
地に臨時根據地設定、3月29日
から8日間そこを中心近くに
の山々で登行準備、酸素裝備のテ
スト
4月9日・13日・三隊に分れ第二次
の豫備登行、酸素裝備テスト
（この間にエヴァンズはアイラ
ンド・ジョグ（C. 20,000 ft.）登
頂、ハント隊長はウム・ギャブ
ヤン（C. 19,500 ft.）ポカルデ
ヤン（C. 20,000 ft.）に登頂
4月13日・A・C（C. 1 兼用）設
定（高度17,220 ft.）52年スイ
ス隊のC1と同處、アイス・フ
ォルの直上）
4月15日・C2（18,370 ft.）設定
（アイス・フォルの中段）
4月24日・C3（20,500 ft.）設定
（ツェス・ジュウムの入口）
4月26日・C4（22,000 ft.）設定
（ジュウムの奥・前進キャンプ）
5月2日・C5（22,600 ft.）設定
5月4日・C6（C. 24,000 ft.）設
定（サウス・コルへの中繼所）
5月16日・サウス・コル攻撃基地
C7（C. 26,000 ft.）設定のため
荷上げ開始
5月26日・第一次アタック隊ポア
ディエン・エヴァンズはサウ
ス・コルを出發、南峰頂上に達
し（28,740 ft.）酸素裝置の故障

により引返す（52年のランペー
ル、テンシンの最高記録28,210
ft.）

5月28日・第二次アタック隊ヒラ
リ、テンシンはグレゴリー、
ローウェン等の援護隊と共にサウ
ス・コルを出發、南東尾根に登
つて27,300 ft. にC8（最高キ
ャンプ）
を設けて假泊
5月29日・ヒラリーとテンシンと

工峯成功へ本會より祝電

去る五月二十九日、ハント大佐
の率いる英國エヴェレスト遠征隊
が登頂に成功したニュースは、六
月二日早くも全國へ傳えられた
が、本會は早速英國山岳會並に遠
征隊長（カトマンズ英國大使館氣
付）に宛て、左の祝電を發した。

Heartiest congratulation for
Everest success

右に對し六月五日英國山岳會か
らは左のような返電があつた。

We greatly appreciate your
kind message of congratulation
and have sent it on
to the Everest Expedition.
Goodfellow, Secretary, Al-
pine Club.

は4時起床、6時出發、9時南
峰頂上、十一時三十分頂上に到
達、十五分間頂上に止つて下
山、直接サウス・コルへ戻る
5月30日・C7（サウス・コル）
に前後泊つたヒラリーとテンシ
ンはローウェン、ノイスと共にロ
イツェ・フェイスを下つてウエ
スト・ジュウム前進キャンプに歸
着
6月20日・ハント隊長、ヒラリー

テンシン等カトマンズに歸着
（以上はザ・タイムズと特約の
朝日新聞6月23日夕刊の記事に據
る）

登頂

6月27日の朝日新聞夕刊に出た
サー・エドモンド・ヒラリー記
「エヴェレストの頂上に立つ」に
よれば、ヒラリーは5月25日テン
シンと共にC4からC7に上り
（3 $\frac{1}{4}$ 時間かゝる）、26日南峰頂上
から引返して来たエヴァンズとポ
アディエンを迎え、28日8:45AM
四〇ポンド以上を擔いだローウ
エ、グレゴリー、アングニマにエ
スコートされて出發、ヒラリー
たちの荷は五〇〜六〇ポンド、2:30
PM 27,900 ft. にキャンプと決
定。三人は直ぐサウス・コルへ引
返す。二時間かかつて三〇度の岩
の斜面に泊場を作る。夕方十分間
に一度位の猛突風があつた外、風
は靜まつた。澤山の飲物とうまい
食事を十分にとつた。——サーデ
イン、バスケット、カンサアン
ズ、なぐめやし、ジャム、ハチミ
ツなど。呼吸は殊んど平常、酸素
を極力節約9~11PM 1~3AM
と使用（一分間リットル）夜間
は申分なし、朝食に水分の不足か
ら體力の弱るのを防ぐために思切
つて多量のジュースと砂糖をとり
バスケット、サーデインを食べ
た。
6:30AM三〇ポンドの酸素をか
ついで出發、交代にステップを切
つて登る。南峰頂上9. AM それ
から上の尾根の印象はエヴァン
ズ、ポアディエンの言つたように
正に恐怖に近いものであつた。尾

根の右端は雪庇がゆがんだ手の
ようになつて直下12,000 ft. の
Kangshung 氷河に突出している。
雪庇と岩の絶壁との間が固い雪で
出来ているように見えた、そこを
ステップを切つて登る。ロープを
止める爲にビッケルを雪に立てる
事が幸い出来た。四〇フィート登
つて待つという風に交代に登る。
最初の酸素のチューブを捨て八〇
リットルの容器（一分間三リッ
トルの割合で四時間半もつ）にな
つたので装具は一九ポンドに減り
大いに楽になつた。依然天候は良
好。一時間程進むと高さ四〇フィ
ートばかりの巨大な垂直の岩にぶ
つかった。成否の鍵かと思われ
た。岩と雪庇の間に四〇フィート
程の狭い裂目が見付かる。全身全
力を振起して「この裂目を登る。
膝、肩、腕を使う正にロッキン・ジ
ライミングを思わせる。それを乗
越えても依然右に巨大な雪庇、左
に急斜面の尾根は續いた。時は過
ぎ、尾根は何時はでるとも知れな
かつた。多少疲労感が襲始めテ
ンシンの動きもぶくたつた。さ
らにステップを切つて登るうちに
フト見ると前面の尾根が突然急角
度になつてゐる。遙か下方にエン
グ氷河が眺められたと記されて
いる。狭い雪の尾根の固い雪面を
ビッケルで切つて進んで遂に頂上
に立つ。
眞先に湧いた感情はもうステッ
プを切つたり面倒なことをしなく
てもいいという安心感であつた。
二人は手を握る。テンシンは兩腕
をヒラリーの肩へまわし、息が切
れるまで互いの肩をたたく合つた
という。11:30 AM であつた。ヒ

ラリーは周囲の寫眞をとつた——
第一にテンシンが一つに結えたネ
パール、イギリス、國連、インド
の旗を振っている處を、三十年前
にマホリイとアーヴィングの何か
残したものはとがして見たが何
も得られなかった。

頂上に十五分止つて歸路につ
く。緊張の後の無氣力が次第に襲
いはじめたので、いよいよ山を下
らねばならない。すでに野望の拍
車は成功の満足感と共ににぶり、
手足も弱まり、息切れも感じ出し
た」とヒラリーは記している。

南峰の下にエヴァンズ、ボアデ
イエンのおいた二本の酸素を身に
つけ前夜の泊場に2.P.M.に歸着。
ゆつくりと寝袋やマットを荷作り
して背にかつて重い足を引ずつて
尾根を下りて行く。「五體はしび
れ時間は夢のようにたつて行つた
が、遂にハイベ隊のキャンプの跡
に到着、そして大きな峡谷を下り
はじめた」こゝで手記は終つてい
る。

この素晴らしい一日の出来事が靜
かな文章によつて書き出されてい
る。能辨に優つて強く人々の心を
打つ。他の國の人ならば又別の言
い表し方をするかもしれない。そ
のすぐれた體力と判断力に驚くと
共に、ヒラリーの登山技術の卓越
が窺われるのである。正にエヴェ
レストの頂上にはイギリスの「マ
ウンテンニア」が立つたのであると
いう感を深くする。

エヴェレスト征服の陰に

これは六月二三日の朝日新聞に
掲載されたハント隊長の手記の標
題であるが彼が「何がわれ」に
成功をもたらしか」といつて挙げ

ているのは次のようなものであ
る。

1 裝備の優秀なこと、特に酸素
吸入器が充分な働きをした事——

(この事に就て六月二五日の Ja-
pan News 及び British Industry
Helped Conquest of Everest と
題した記事がある。即ち、百以上
の商社がそれらの裝備をサプライ
ス二の政府の省 (the Admini-
strality and Ministry of Supply)
三つの政府關係の技術團體 (the
Medical Research Council,
Royal Aeronautical Establi-
shment and the Institute of
Aviation Medicine) も共に力を
合せたのである)。

2 先輩の長い経験、今回の企て
に對する慎重な準備と計畫

3 天候に恵まれた事。五月一五
日以来天候は安定して來た。三回
の攻撃を行う餘裕があつた。こと
に第二回アタックの六月二九日の
快晴。

4 「今回の登山隊ほど見事に團結
したチームを見出す事は難いだろ
う」「われ」の成功は全くこのス
ムーズな愉快な協力が何にもまし
て大きかつた」と記している。

5 初期の高度順應と訓練が奏効
した。隊員の健康状態は終始極め
て良好であつた。隊員中六人はサ
ウス・コルの上で何の困難もなく
數日を過し、英隊員は五〇〜六〇
ポンド (七貫二百匁) の重荷を二
萬七千呎へ擔ぎ上げている。

6 最高キャンプを頂上から一千
呎下に設けたこと

(これは右の手記には無いが、
隊員がヒマラヤの經驗を重ねてい
たと同時にマウンテンニアとして

性格と技術に優れたものを持つて
いたこと)。

ジモン・ハント氏
エリック・シブトン氏が A vet-
eran Himalayan and alpine
mountaineer と書いている通り

The Himalayan Journal
1936 年號に Peak 36, Satoro
Karakoram, 1935; Kathoi by
the South Face, 1938 年號に
A Winter Visit to the Zemu
Glacier, C.R. Cooke と共に
1949 年號に Mons Claudianus,
1950-51 年號に Memories of a
Himalayan Peak 等を寄稿して
いる。この最後の短い一文に彼が
ヒマラヤのヴェテランであること
が、おのずから語られているよう
である。

トニン・氏
The Himalayan Journal (1950
年號) の Sept. 1950 現在の Him-
alayan Porters のリストによれ
ば、Tenzing Bhutia (1917 生)
はすべてのシムルパ中最も技術が
優秀と思われ、英語の會話は優れ
ている。輝かしい將來を持つ」とあ
る。Tiger's Badge 1936 Ev.;
G. (Osmaston), '38 Ev.; G.
(Osmaston), '39 Chitral (Mi-
dar?), '46 Sikkim (Kirsopp),
'47 Ev. (Dennan); Gangotri,
(Roch), '48 Lhasa (Tucci), '49
Nepal (Tilman), '50 Bandar-
punch (Gibson), '50-1 Kara-
korum (March), 等の經驗を持ち
朝日新聞の記事の引用には同社
から了解が與えられた。

登頂のしらせは先ずロンドンへ

送られ、そこから一般に發表され
た。日本の新聞には六月三日に發
表。朝日新聞やニッポン・タイム
ズはこれに就て社説を掲げたが前
者ではヤングハズバンドの「マウ
ン・エヴェレストのエビッド」を
後者ではマホリイの「何故エヴ
ェレストへ登るか」の質問に答え
たもの。Because it's there! と
いう言葉を引用していた。人々は
この山に對するイギリスの今までの
歴史を覚えていた。恐らく他の
國の登山隊が成功した場合には又
別の印象を受けることである。

一九二四年にフレンシユ・フイ
ルドは The Conquest of Mount
Everest の一文の終りに「山登り
は、ちやうどステピング・ストーン
をふんで行くように先輩の肩を
使つて登る」と記している。ヤン
グハズバンドは三〇年前に、そし
てシブトンはそれから三〇年後
に、もしこの企てが失敗したとし
ても「更に更に」この山を目がけ
て出かけるのであると述べていた
が、こゝに登頂に成功した事は慶
賀に耐えない。三日の新聞を讀ん
で、或る婦人が強く心を打たれる
思いをした——それは、自分は
「エビッド」を讀んでいたからだ
と私に言つたが私も同感であつ
た。

(K・T)

次號原稿の切

九月五日です。會員通信はもち
ろん、紀行、情報、書評、隨筆な
ど御送り下さい。なるべく一行十
五字にしてお書き下さるようお願い
します。

× × ×

× × ×

× × ×

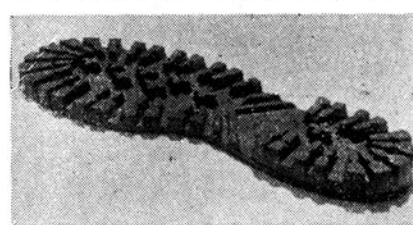
× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

送られ、そこから一般に發表され
た。日本の新聞には六月三日に發
表。朝日新聞やニッポン・タイム
ズはこれに就て社説を掲げたが前
者ではヤングハズバンドの「マウ
ン・エヴェレストのエビッド」を
後者ではマホリイの「何故エヴ
ェレストへ登るか」の質問に答え
たもの。Because it's there! と
いう言葉を引用していた。人々は
この山に對するイギリスの今までの
歴史を覚えていた。恐らく他の
國の登山隊が成功した場合には又
別の印象を受けることである。



山友社 高橋靴店

東京都新宿區三榮町 3
電話 四谷 (35) 1929

八重洲口營業所開設

中央區興服橋二の五
東京驛八重洲口下車
鐵道ビル筋向イ角
電話 (27) 五六五四

スキー用品

東京・新宿駅前

かずみ

TEL (35) 2959

Well done!

★エニ登頂餘話★

エニ登頂の報とともに、ハンと隊長のもとへは、英女王からもチャールズ首相からも直ちに祝電が送られた。ソトマン

ズその他ネバールの町の電信局は、その後も祝電の洪水に悲鳴をあげていくという話である。これらの祝電のなかで、われわれが一番ききに注目するのは、英國山岳會がどんな祝意を表したろうかという点である。英國山岳會單獨でなく英國山岳會長とともにヒマラヤ委員會の委員長を兼ねるサー・エドウィン・ハーバード、これに王立地學協會のJ・M・ワデー會長、および英國山岳會副會長のC・エリオットの三氏連名で次のような祝電が送られたのであった。

On behalf of our respective councils, fellows and members we send you heartiest congratulations on the great feat of Hilary and Tensing in being the first to conquer Everest.

エニ登頂遠征を三二年間にわたって主宰して来た當事者としては、案外冷静なのは、第一公式の電文であるからだろうか。これらの祝電を讀みながら、私がいかなと思つたのはエディンバラ公の祝電であつた。

Everybody is delighted with the wonderful news, Well done. Congratulation to you all, Philip.

いかにも海軍將校らしい若さで、仲間の冒險を祝福するといつた気分を短い電文が感じさせてくれるのである。Well done!「でかした!」という封建的表現でもなく、むしろ「やつたね!」といつて眼で笑うような、あの感じである。若い隊員たちには、さぞかしビタリと来た表現であつたろうと思われる。

×

Well done——という言葉は、また私はもう一つ印象深く記憶していた。それは、アンナブルナのヘルツォーグたちの登頂後のことであつた。エニ登頂にくらべて、アンナブルナの登頂は、遭難と紙一重のなかでの激しい苦闘をもつたものだった。二萬三千フィートのシレヴァスで夜を明し、二日二夜、ろくに何物も食べないヘルツォーグら四人が、奇蹟的にも第四キャンプから救援に來たシヤツクに巡りあつて、危地を脱した。大理石のように凍えて動くことも出来ないヘルツォーグにシヤツクがいた。

(T.S.)



會津朝日岳

大白川—石伏—朝日岳

高波 吾策

私達越後支部の山仲間が昨年春残雪の魚沼駒ヶ岳から平岳、尾瀬沼を縦走した時に見た南會津の丸山岳、朝日岳を、來年やろうじやないかという事になつて一年を樂しみに過したが、今年の四月末に小山の伊倉氏宅へ集まり計畫を立てたところ、五月の初旬決行ときまり記録、參考資料集めを栃尾の佐藤金一氏にやつていた。その結果東京の徒歩淡流會の川上氏が朝日村の白澤から入つてくるので私達は石伏から東澤に入ることに、五月四日大白川丸や旅館に集合した。以下私の山日記を見ると……

大白川から鬼ヶ面—田子倉

五月五日朝四時起床、外はどんなに空模様、山櫻、こぶしの花、岩がみなどが私達の眼を慰めてくれる。一本松澤の残雪を踏みしめて六十里越えを進むうちに一時間足らずで道は無くなり忠衛門澤への分岐点で「シンベイ」(越後人が雪の中で履くワラ靴で魚沼ではブツベイという)に二本ジメを取付け忠衛門をつめる。雪が一ぱいあつたので思つたより早く頂上へ取付けた。雪の無い時はこの澤はブツシュで登れないそう

だ。鬼ヶ面山頂上(一四四五米)着十二時卅分。浅草岳、守門、毛猛横山と近くの連山から遠く飯豊、

谷川岳連峰、日光の山々、更に目指す朝日、丸山岳は只見川の流れを下に見て横山、高倉山の前衛を従え遙かにそびえ立つ。頂上で二時間、縣境を踏出し鬼ヶ面山東尾根から只見澤へと一舉に降る。尾根は廣々として残雪多く快適なグリースードが出来た。

只見澤と只見川の出合に着いたのが五時、出合から田子倉部落まで約卅分、道ばたに咲くタムシバの白、オオヤマザクラの紅、そして河原柳の緑が疲れた足を軽くしてくれた。六時に田子倉部落大丸や旅館にシンベイを脱ぐ。

六日、田子倉の一夜は雨の中に明けた。宿の主人がこの部落も早ければ來年の七月には湖底の故郷になりますといつた。とも角外は雨、此處にいる譯にもゆかず連絡してある隣部落石伏の目黒宇田治氏宅に向ふ。途中ダム建設地點にダム反対のポスターがはつてあつて眼をひいた。目黒氏宅にリュックをおろす。雨は依然止まず、待機と決つて爐を囲みパイをやりながら、熊狩、かもしか、猿狩の話。

石伏から東澤を登る

七日、四時起床、昨夜來よりの雨も止み雲の切れ目から朝日がさす。人夫は目黒彌吉(三七)、矢澤賢次(三〇)さんと決定、四時半石伏出發、東澤と西澤との別れまでは山道を行く。私達は東澤に入りゼンマイ採りの踏跡を頼りに右に左に徒渉の連続、水の冷いわりに樂な徒渉だ。權太郎澤と本澤との出合に着いたのが十二時、こゝに私達が下度入つた日につけたといふゼンマイ取の小屋があつた。この小屋は五月中旬から八月中旬までか

けておき秋になると雪につぶされるため取こわしておくとのこと。權太郎澤は左から、本澤は右へと入つてゐる。本澤を約一時間登つて二本に別れては左の澤大モチ澤を行き尾根に取付いたのが三時眼前に朝日岳が姿を見せる。頂上をやれば出来るが時間はすでに四時近いので一五〇〇米附近の尾根にキャンプ地を見付け今日の行程を終る。

朝日岳主稜を越えて白澤へ

八日、今日天候は曇天ながら遠望は雄大、六時卅分キャンプ地を出發、朝日主稜尾根はやせていて處々はい松と石楠花の物凄くブツシュが連續し同行の人夫連中もこの尾根は土地の者も通つたことがない。という。切立尾根をやつと通り抜け頂上三角點着が九時。ガスは増々深く丸山岳を目の前にしながら來年決行する事にして休憩も早々朝日村の白澤部落を目指し一三九一米の三角點から右に赤倉本澤の物凄くデブリの中を四本ジメを利かして一氣に降り、ヌマノ澤出合のゼンマイ小屋に着いたのが十二時、白澤部落着が一時。雲の切れ目から朝日の主峰が見える。雪の世界から來るとブナ、ナラ等の新緑が美しく黒谷川、伊南川等を右に見て沼田街道をブラブラリと石伏目黒さん宅に着いたのが六時であつた。なお私達のパーティは左の通りである。

何れも越後支部員。

隊長、笠原藤七(村松)、高波吾策(土樽)、佐藤金一(栃尾)、長崎達男(妙高)、伊倉剛三(小出)

本誌前號、瀬名さんの「山の映画」の中に辻村の歐洲アルプスの幻燈畫の事が書かれてあり、懷舊の念にたえないので、其事を書いて見る。

あの幻燈（スライド）は天然色寫眞ではないのです。勿論あの頃にもオートシローム、其他の天然色撮影のものはありましたが、なか／＼スライドにする程簡単容易なものではなく、且つ畫の透明度が不足して實用（幻燈に）には適しませんでした。

辻村の幻燈

高野 鷹藏

其頃スライドを作る事は吾々素人でもやっていたが、彩色する事は全く専門的で、殊に横濱と神戸には西洋人の需要が多いので、仲々優秀な職人？がおりました。あの辻村のスライドは總て彼自身撮影の葉書判のフィルムから作らせて、彩色の具合はいちいちこの部分は何色と云う様に克明に注意して、横濱の江南という西洋人向きのあしたの透明（寫眞の畫）やスライドを作る家に私が注文して作らせたのでした。變な事を書きますが、確か一枚彩色して金壹圓ではなかったかと思いますが。（白黒は五十錢？）

近來イーバトマンや日本の天然色フィルムを眺めていると、これも手で彩色したのかなと、思いまどう程實は昔のスライドの彩色の上手であつた事を思います。

近藤茂吉があの頃渡英した時に、日本製の彩色スライドを英國の山岳會に持つて行つてもらい、あちらのスライドを交換してもらつた事がありますが、あちらで頗る好評であり、あちらからもらつた白黒スライドが何んだか間の抜けたものに感じたのは事實です。

辻村のこのスライドも、英國山岳會からもらつたスライドも、皆んな虎門の事務所で戰災に失われたわけですから、辻村の幻燈講演は幾度所々方々、それこそ打つて廻つたか覺えませんが、必ずと云う程、其映寫技手は斯く申す筆者でしたから、暗闇ではありますが、瀬名さんとも同席したわけでしょう。因に其時の幻燈機械は近藤君に英國から買つて來てもらつたもので、これ亦戰災でなくなつてゐるのです。何もかも淡い夢の様な思い出に色あせて來てますが、瀬名さんが「ばら色や紅に輝く峯々の姿は實在の山とは思われない程美しかった」と言われた、あの色は年老いた私の目の底にも今も尚あざやかに、彫りつけています。



會員通信

高原 深緑

見學
府杉山
川山學
裕孝玄

啓蟄の頃地蟲が穴を出てもそもそ動き廻る様に平素至つて足の重連中がみこしをあげて歩き出したのは、美ヶ原から和田峠一車一池の平と云う誠に優雅で、抒情的な道筋でした。梅雨の晴間の隙を縫つて、六月十四日松本から三反田石切橋を経て（松本から櫻清水迄ハイヤー一臺千圓の由便利になりました）王ヶ鼻に上りましたが（當日松本市観光課主催の撮影會あり）撮影會の参加者と間違えられ絶世の美人のモデルの提供を受けてあわててシャッターを切るなど第一日からまるで彌次喜多道中式の面白場面を味わいました。王ヶ鼻の電波中繼所の東側に今夏から小屋が一軒新設され開業している。名稱は高原荘、木造トタン葺で五室収容人員三〇一四〇（風呂、便所あり）宿泊料は二食

付三五〇一四〇圓、石切場櫻清水茶屋主人小澤多賀男氏の經營。水場の遠い缺點はあるが、和田峠へ抜けるには足弱向で便利です。チャーミングな新設計（天火付）のストープに心を残しつゝ山本小屋に急ぎました。風が出て、霧が巻いて少々冷える。

十五日は少しボツボツ落ちて來たが、身ごしらえをして、シオツレ場から一目散に和田峠への起伏にとりつきました。三峰から二つ、鉢伏あたりを流し目に見て岩鏡や苔桃、鈴蘭の點綴を楽しみながら東餅屋に下りましたが天氣思わしからず一まず下諏訪に下り、歌の仲間がよく利用するぎん月に一泊、翌十六日快晴に力を得て又和田峠の振り出しに戻り舊の右を巻いて八島池からジャベルを訪問、高橋氏不在なるも母堂、夫人にカメラを向けたりして小憩。すつかり気分をよくして一氣に車を越え、目の下蓼科大池に駆け下りました。雷から渡舟（賃二〇圓）で蓼科山寮に入り、神谷さん直傳の快晴感謝の祝盃を舉げました。歩くのは手段でこれが目的だったのかも分りません。十七日は中位の天氣で平地行進が適當と考え樽ヶ澤鐵泉から蓼科牧場に寺島父養氏を訪問、入牧したばかりの牛や馬を前景に蓼科北面の殘雪一條をカメラに納め牧歌的だと何となくと悦に入つて大變な御機嫌なのですから全く甘いものです。

此處でもペンキ塗りのパンガニーが六棟新設され四畳半一日使用料四〇〇圓毛布三〇圓ランブ三〇圓（照會は北佐久郡片田村同牧場事務所宛）の由、池の平に新設さ

れている君待莊と共に蓼科が少々苦笑いをしてゐるのではないかと思います。番小屋から辨天神、南平とノンビリ歩いて燈の入る頃山寮歸着。丁度六月十六日附の信濃毎日信大助教授小林國夫氏の美ヶ原は火山ではないと云う注目すべき論文の載つてゐるのを發見むさぼり讀みました。

十八日大雨、裏山の鈴蘭群落園に立寄り芳香に鼻をうごめかしながら、無人の交野氏小屋を見廻りオルゴールを一寸かけさせて貰つて、又鍵をかけて出て來ました。交野さんの居られない池の平は玉の盃の底なき如き感じがします。歸ると東京もひどい雨でした。山岳會に入れて頂いて、これが處女通信で御座います。（GEN）梅雨こめて野の花あまた咲くあれ

大江川温泉 沼山峠

坂倉登喜子

大清水から三平峠への登路には一ノ瀬小屋が新設され、縣で作つた一杯清水の水場や、立派な指導標等完備して、神苑尾瀬への道は限りなく好ましいものとなりました。匂いこぼしやむらさきやしお等の群れる三平峠の登り迄、出迎えてくれた長英さんとは、五年振りの再會をした。

その内の一日を私は長蔵小屋から大江川温泉の小規模ながら纏つた風物を縫つて、沼山峠へ登つて見ました。まだ見ぬ檜枝岐村へ越える峠は小屋から約四〇分、水芭蕉、しよじょうばかま、ひめかやく等の群落、立山りどう、いわき等を群落で埋められ、水芭蕉を前景にした燦岳の姿は、この附近では最も優れた風景でした。

本書は山岳研究スイス財團の編集になる遠征・アルピニズム・科学という副題がついている。第5巻はウィス・デュナントが指揮したカンチのネパール側の山々に登った1949年の記録が80頁をしめ、1934年のポーランドのアンデス、1949年のネパールヒマラヤをさぐったアーノルド・ハイム、ヒマラヤ登山史・マルセル・グルツ・1949年の山岳展望などを収めている。この叢書は1946年に第1巻を出してから毎年刊行されている。第7巻はドイツでも出版され、第8巻は本年アメリカからも出版される。新しいアルパイン・ジャーナルというところ。なおフランス語版がある由であるが詳らかにしない。一般的というよりは研究的である。スイスのことはよくわからないが、山の本もなかなか出ているようで、下記のものがある。

* Longstaff, Tom: Ein Alpinist in aller Welt.

Zürich: Orell Füssli, 1951 S. 285, 29 Bildtaf. 15 Karten. Ln D.M. 18.50

いわずと知れた This my voyage の獨譯。

* Albert Heim: Leben und Forschung. von Marie Brockmann-Jerosch, Arnold und Helene Heim Basel: Wepf & Co. 1952, S. 268. 11 Abb. 15 Taf Ln D.M. 17.80

アルプスの碩學ハイム教授(1865~1952)の傳記。アーノルド教授の父君。

* Graber, Alfred: Ihr Berge strahlend Unvergänglich. Zürich: Orell Füssli S. 225. 16 Bild. Ln. D.M. 16.25

詩人の筆になるアルペンの讃歌のようだ。オーレルはモルゲンターラーの本を出していたところだから、同じような香り高いものかも知れない。

* Ertl, Hans: Bergvagabunden. München Nymphenburg.

nburger. 1952. S. 272. 29 photo. D.M. 10.80

戦前に一度出た再刊。グリーンランド、ヒマラヤ、アンデス、アルプス彷徨記。リッジマースはケーキの中の杏子ばかり集めたような本だといっている。短文集。

* Harrer, Heinrich: Sieben Jahre in Tiber. Verlag Ullstein. 1952. S. 264. Bilder, 8 Farbrafeln, 1 Karte. Ln. D.M. 16.50

アイガー北壁の初攀者ハーラーのヒマラヤ逃走後アウフシュナイターとともに西藏ラッサにいた《ドライラマの宮殿でのわが生活》と副題がついている。なおこの本屋からアンナブルナの獨譯本が出ている。

* Lukan, Karl: Kleiner Mensch auf grossen Bergen. Salzburg: Bergland-Büch 1952. S. 236, 40 Taf. 7 Zeich Ln. D.M. 14.50

* Bauer, Paul: Kampf um den Himalaja. München: Knorru. Hirth. 1952. S. 218 14 Abb. D. M. 6.80

戦前の版よりも若干増補されているらしい。

* Leo Madusceka: Junger Mensch im Gebirg München: Richard Fflaum. 4 Auf S. 240. 37 Bild. D.M. 9.80

戦前に出たもので4版が出た。編集はシュミットジツツ、岩登りの不世出の達人の文集。なおアルマンの高山征服や小説などがあるが、見もしないで書かでもの記はこのくらいで……。

〔註〕 Ln は麻装, D.M. (ドイツエ, マルジ) 1 マルジは約 100 圓。

近藤 等 著 ヒマラヤ

B5版二〇六頁 寫眞四〇葉
四五〇圓 朋 文 堂

著者は本書の「あとがき」で「ヒマラヤの概念、またこれまでの登山の歴史を紹介して、ヒマラヤへの理解を深めていた」といふ「希望の下に本書を刊行した」といっている。著者の意図はある程度に達せられたと思うが、もし再版の機会があれば是非訂正してほしい箇所が多少はある。

(1) 最初のヒマラヤの概念の所で著者は詳細な地理的説明を避け、手ざわよく概述されているのは結構だが、ヒマラヤ山脈が西北進してカラコラムとなり更に西へ延びてパンデヤブ・ヒマラヤとなるように見られている(46頁)。併し地圖を見ればわかる通りカラコラムはインドス河の北側にあり今日では別の山脈として扱う方が普通で、カラコラム・ヒマラヤと云う表現は、コンウェイ時代ならいざしらず今日では用いられない。またカラコラムの西にナンガ・パルバットがつくような説明は正しいとは云えない。43頁の地圖でK2の方がナンガより南に位置していることも訂正を要する。

ヒマラヤの地誌は木暮さんはじめ多くの人が使用したバラードの「ヒマラヤの地理・地質概略」が今日でもまだ基本とされている。従つてそれに基づいて説明することが望ましい。著者は勿論詳書を綴られたろうが、バラードを今

一度熟讀して足らざるを補つては(2) 47頁のエヴェレストの高度は今日迄公認されている二九〇〇二呎の換算値八八四〇米をとるべきで八八四四米を説明なくかゝげたことは不適當だ。

(3) ドーラギリの綴りは Dhaulagiri か Dhaulagiri (ロングスタフの著書) だから、ダウラギリ又はダオラギリが正しいのではないかと思う。(エングレはドーラギリをとっている由)。

(4) エヴェレスト第五次遠征というのが一九三四年に行われた記述がある(125頁)、これは間違ひである。しかもその時の隊員シブトン、ティルマンは、同じ年の大體同じ時にナンダ・デヴィへ入つていくことが本書の178頁に記述されている。いくらヒマラヤのグエテランでも同一人が同じ時にヒマラヤの別の山域で行動していることはおかしい。年號の違いは、52頁にもみられる。

以上は細かいことのように考えられるかもしれないが、地理上の又は歴史上の知識ではこのような間違ひはどうでもよいとほつておいてはいいないで敢て指摘したい。次に本書に挿入された寫眞について一言する。寫眞はマナスルウのも含めて、各國の遠征隊が將來した見事なものばかりで、また印刷も上出来だ。

撮影者名はとも角何國の遠征隊によつて撮影されたかの説明位つけるのが、先人に對する禮儀と思うがどうだろう。しかも本書の生命が四十枚の寫眞に半ば以上かゝつていからには、このことは尚

ドイツ語系の山の本 (2)

諏訪田 榮藏

會報 164 号について、筆者が手にしたもの (§) と新刊とをお知らせしよう。

§—Dyhrenfurth, D.O., : Zum dritten Pol. Die Achttausender der Erde. München Nymphenburger. 1952. S286. 48 Taf. GL. D.M. 24.00

ディレンフルト教授は 1930, 1934 年にカンチとカラコラムに遠征した人。本書は 26,000 呎 (7925 m) 以上の山の登攀を対照とした研究書である。内容は 16 章に分れ、8000 m 級の 1951 年までの遠征を含み、対象とした山は 13 座で、山名と標高問題、登攀史、将来の可能性と最終の見通しと地質ノートについて論じている。といつても、マナスルやマカルーのように手がけられていない山に対する記述は少い。7000 m 峰登頂表と文献 (209 点・地図 15 点) 索引が付きガッチリしている。寫眞は主として航空寫眞が選ばれ、版も大きく製版もよいので研究用としては貴重な文献である。

§—Schätz, J.J., : Heiliger Himalaya. München : F. Bruckmann. 1952, S. 120 D.M. 22.80

副題に人々と山々、神々、精霊と悪魔としてある。寫眞帖とアンソロジー、やはり 8000 m が主で、天然色寫眞は 8 葉で山のすばらしいものはない。普通寫眞 76 葉も見ただけが多いが大版なので鮮明で美しい。

「アルプスの美しさは静かだが、ヒマラヤは圧倒的に壯麗で、私は神々の御座の前に立つた蟻だ」とウィス・デュナント博士の言葉などがある。

§—Hartmann, Hans : Das Kantschtagebuch. London : Edward Arnold, P143 3S 6d

1931年バウアーとともにカンチに見参したハルトマンの日記で、1934年ミュンヘンのケゼルから出版されたのが原典。本書はアーノルド (ラウンド・カンチなどを出した本屋) のモダン・ジャーマン・シリーズのシニア級のドイツ語教科書というのが變つている。編集はグルンディ氏である。原典は 6 月 30 日から 9 月 27 日まで 151 頁だが、本書は 10 章にわけられ 7 月 3 日から 9 月 27 日までを 92 頁にダイジェストしている。本文にも脚註があるが、學習欄は A 問題・補遺などがあげられ、B は英文獨譯・文法變化などがある (93~112 頁) 語彙 (113~143 頁) がついている。英語學習者のドイツ語學習の手頃な (また山登りの見方も相當入っている) テキストと思う。挿畫あり。

§—Eidenschink, Otto : Richtiges Bergsteigen. München : Bruckmann. 1951. S. 224.D.M. 6.80

著者はガルミッシュの山案内人。岩と氷の技術と一般登山術で、そう新しいことも書いてないが、要領はよい。

§—Grob, Schmaderer und Paidar : Zwischen Kantsch und Tiber. München : Bruckmann 1950. 'S. 143. D.M. 12.80

1937 年のシニオルチ第二登と 1939 年のテントピージ初登頂などカンチ周辺の山々を登った寫眞記録 (100 頁) と日記 40 頁。いかにも鮮明な寫眞は見とれるばかり。天然色でないのが残念。

§—Hrsg. S.S.A.F., : Berge der Welt. Bd. 5. 1950
Bern. Verbandsdruckerei. S. 256. Sw. fr. 22.50

大切である筈だ。

著者は「本書をヒマラヤ研究の入門書としていたゞければ望外の幸」ということも書いてあるが、入門書というものが、それを土臺として更に研究を推進し得られるものと解するならば、本書は甚だしく不親切だと云わざるを得ない。つまり本書の讀者が、このまゝでは更に何を讀み、何に基いて更に研究を進めるかは全く示されてないからである。若し著者にその希望があるならせめて基本的なヒマラヤ文獻の數種、十數種位でも挙げておくべきではなかつたか。

以上諸點が或る程度訂正されるなら、外國文獻を一つ一つ購読する餘裕のない人々にとつては、すぐれた寫眞の複製と相俟つて、ヒマラヤ遠征の新しい概説書となろうし、入門書としても推薦し得るのである。(望月達夫)

酒井菊雄著

山とカメラ

B 6 版 一八〇頁
寫眞八〇葉 二八〇圓
明玄書房

ハミリ、十六ミリ山岳映畫の製作者として知られている著者が、映畫撮影の合間に撮つたという八〇葉の寫眞を主とし、それに撮影の簡単な紀行をつけたのがこの書だが、二つちりと山と取組むとか、採光、構圖に注意を拂つて得たという風なものではなく、單なる記録に過ぎないもの。だと序文で著者がことわつている如く、映畫から受けるほどの感銘のないのは惜しい。

岡田喜秋著

こころの旅

B 6 版 二四八頁
寫眞七葉 二六〇圓
千代田書院

高校を松本で、大学を仙臺でと學問でなく山によつて學校を選んだこの若い著者の清純で熾烈な山と高原に對する憧憬、そして郷愁がこの書の支柱をなしている。題名の如く登山記でもなければ從來の如き紀行でもない。「山」という形象に心を託し、山を通じ、自然を通じ「著者の心の欲求を語っている。著者が望んでいる如く山や旅をことさら愛しない者にも、戦後の一青年の自然に對する限りない愛情が一讀して理解されるだろう。

しなの、みちのく、巷間望岳、こころの遍歴、山と旅と人間との四部に分れているが、どの部分にも青年らしい清新さと感傷とが流れていて微笑ましい。河上徹太郎氏が序文を寄せて旅を新しい人生探求の一つの角度にしたというが著者の理想主義的な信念だと云つてもいい。肯ける。山だけについて云えば少し物足りない点もあるが一風變つた山の本として紹介しておく(公)

近頃英国で出版された山の本

(5) 田 邊 主 計

- George Seaview: Francis Younghusband, K.C.
S.I., K.C.I.E. 1863—1942
Explorer and Mystic
pp. xi-391. 13 illus. 4 maps.
John Murray, 1953 25/-

166 號に豫告した此の本は五月下旬に到着した。満洲から中央アジア、バミールからヒマラヤの初期の旅行、軍人として、外交官として、地理・自然科学の研究家として、宗教哲學者として、更に、エヴェレスト遠征については忘れられない重要な人としてサア・フランシスの豊富な一生は 25 章に涉つて詳細に記されている。シイヴァ博士は多くの資料を集め、それらをしてヤングハズバンド自身を語らしめる方法をとつた。彼の身近の事柄の多くが發表されているが、著者が特に Mystic という傍題を付したようにヤングハズバンドの World Congress of Faith の宗教運動、彼の心うち深く發展した「神秘的な精神」の説明にはこのように彼の身に近づく事が必要である。第22章(17頁)は The Royal Geographical Society and Everest Expeditions. 地圖は Longstaff 夫人の手になる。

- W.H. Murray: The Story of Everest 24 pages of photos. 14 sketch-maps.
Dent, 1953 15/-

エヴェレストを東西南北から、又発見の最初から 1952 年のスイス隊の登山に至るまでの歴史を記述、著者マリは 1950 年のガルワル・ヒマラヤへのスマットランド・バアテイのリイダーであり、1951 年のエヴェレストにはシブトンと同行している。(「山岳」第 46.7 年参照)。今春刊行、もうちき到着する。

- Thomas Weir: The Ultimate Mountains 80 photos. Cassell, 1953 21/-

ウィアはマリの 1950 年ガルワル・ジマオン・エクスピディションに加つているから、その時の事など記したものである。

- F. Spencer Chapman: Living Dangerously Illus. Chatto & Widus, 1953 12/6

危険に満ちたかすかすの旅行記。グリーンランド、ヒマラヤ、マライの密林などでの。さきに “The Jungle is Neutral” を著したが、アルバイン・ジャーナル (No. 278, May 1949) に「日本軍占領下のマライ半島旅行」を寄稿している。travels というが密林でのゲリラ戦であつて、あらゆる危険を冒し、病氣と戦い、一度は日本軍に捕えられるが、脱走する。よく生きているものだと思つて疑う程冒険に不死身になる。

なお、アルバイン・ジャーナルの No.271 (Nov. 1945) の Frank Smythe の書いた追悼文によつて Peter Oliver の Burma で戦死している事を知つた。36 歳オリヴァは 1936 年のエヴェレストに参加した人である。會報 163 號に私は「エヴェレストのテンドルブ」と題してオリヴァがつれて行つた犬の話をかいたが、その時はあいにくまだこの追悼文を読んでいなかった。“Everest, the Unfinished Adventure” にある隊員の肖像のスケッチはオリヴァの書いたものである。

- William O. Douglas: Beyond the High Himalayas Gollancz 16/-

ドグラスはアメリカの大審院の判事。夏の休暇を中央アジアの旅行にすごした。この本には 1951 年の Hindukush (Gilgit へ) Karakorum (Ladak へ) との二つの旅行

を記しているが、後者では 17,000 ft に達する数々の峠を越え、240 哩の旅を續けたのは、この年輩のしかも肺に缺陷のある人にとっては、なかなかの事であつたろうと書評にあつた。この旅行は一つには政治の方の用もあつたが、同氏はスマイスの “The Valley of Flowers” を読んでこの旅への誘いを感じたのだと書いている。(この本は 16/- 880 圓位だが同じアメリカ版は倍以上する。アンナブルナ(ヘルツォグ)もイギリス版はアメリカ版の半値。第一、アメリカの活字は何だか品位がなくて私は好まない。

- Clair Elian Engel: They Came to the Hills. Allen & Unwin, 1952 21/-

著名な登山家を選んだ 17 のエッセイからなる。例えば Meije の征服者 Boileau de Castelnau の研究など、フランスの人々についての研究の方がイギリスのそれらよりも優れている。これらの登山家の友人や末孫から親しく集めた新しい資料は Alpine Literature に welcome addition である、と書評にあつた。それから會報 151 號に書名だけを記した同博士の A History of Mountaineering in the Alps. pp. 296. illus. Allen & Unwin, 1950 21/- については Graham Brown がアルバイン、ジャーナル (No. 282, May 1951) に詳しい書評を出している。

—アルプスについての文献に廣汎な知識を有し、その登山史に關して熱心な研究を續けている Mille Engel のこの本は並々ならぬ力作である。彼女独自の考え、彼女自らの好みを勇敢にその研究に披瀝した事によつて、獨特の新鮮な登山史を生んだ、と評しているが、一方事實に相違の點(中には印刷上の間違いかと思われるものもあるが)多いのを遺憾としている。彼は多くの誤りを指摘して再版に於て訂正される事を望んでいる。(フランス版ではいろいろ訂正を行つたという事である)。18 章のうち第 7 章 (30 頁) は The Alpine Club について第 12 章 (20 頁) は Mountains and Literature について、巻末の Bibliography で 1676~1947 年間の文献約 350 を年代順に掲げている。又、第 11 章の「戦時中のアルプス」は人々に注目された。Smythe の序文がついている。Mille Engel の “La Littérature Alpestre en France et en Angleterre” (2 vols.) は French Academy の賞を與えられている。

- Katherine Oldmeadow: Under the Mountain Cassell 7/6

Trin 11 歳, Sarah 13 歳, Gay 6 歳の三人の子供が、休暇をスウィツァランドで過ごす間の「冒険」を楽しく述べたものというのだが、どうもこういう本は読んで見たくなる。

- Philip Stanford Authentic Reference Maps

Switzerland, India, New Zealand, Canada など、せいぜい山の多い國のを、ひまに眺めていると楽しい。Switzerland は 1:500,000 scale で戦前にあつた Philips' Authentic Imperial Maps の 1:578,000 よりも見易い。丸善に澤山來ている。値 195 圓。

- Who's Who (Adam and Charles Black 刊)

これは山の本ではなく、人名録であるけれども、私はこの本から山や探險に關係のある人々を多く寫しとつた。死去した人々は除かれるから、Who was Who も必要である。これは Vol. I, 1897-1915; Vol. II, 1916-28; Vol. III, 1929-40; Vol. IV, 1941-50 と出ている。定價が 5 鎊位だから一人で買いく、私は 2,3 年前のあいているのを友人から借りて見ている。

これらの山の本のうち、いくつかは丸善に來ている。丸善の中村春太郎氏は山の本もよく氣をつけて、店用として目ぼしいものは取よせているが、部數が少ない事もあるので、私はそれを待たずに注文している。以前、丸善には風月堂の喫茶室があつて、買つた本などを、そこですぐ開けて見たりしたものだつたが、今またこの風月堂が二階に店を開いている。



登山團體國際連合

(U.I.A.A.)一九

五二年度總會の概要

一、九月七日オーストリアのゼル・アム・ゼーに開かれた總會は、カナダ山岳會及び英國登山評議會代表エグモンド・ダリス氏議長の下に、二十一國から二十六團體の代表が集つた。

二、主な決議事項は

1 山岳映画 a 山岳映画の作成—慎重研究のこと。b 登山を主題とする現存映画のカタログ作成—加盟團體に照會して回答を集録すること。

2 スキー地圖用記號—本總會採用のものを各方面に採用方を勧めること。

3 スキールートに於ける雪崩の危険—スイス山岳會では十五年來研究をつけているが未だ満足な解決方法が見つからない。常設事務局で研究し具體案を總會に提出すること。

4 ザイル—既存の國際委員會の中間報告を聞く。更に研究(特にナイエン製ザイルについて)をつづけること。

5 山に於ける災難救助—關連問題研究の爲め國際委員會を設置すること。

ること。

三、ヒマラヤ遠征に關する詳報入手の困難を嘆太利山岳會代表が指摘した結果、總會は遠征隊を出した團體から連合加盟團體に對して遠征に

よつて得た經驗及び結果を詳細通報し、將來の計畫立案に資する様にしたいとの希望を表明した。

四、マッターホルンのケーブルカー問題につき、スイス政府はスイス側に變更を加えたり建設したりすることに反對の旨決定したことを議長から披露し、本件反對の爲めに設けた特別委員會は大いに努力して昨年中に九萬人の反對署名を集めた。世界中に擴まつた反對とイタリア側現地附近住民の反對とに鑑み、イタリア政府もバイア同様の決定をすべきものと信ずる旨議長から述べた。

五、次回は一九五三年夏ギリシヤで開催に決定。(日高記)

★東京支部から

六月二十一日 午後より小雨降り伊東郊外の東芝三宜園で、東京支部理事及評議員合同役員懇談會を催した。先發の杉本、神谷、野田、金坂、廣羽、野澤諸氏に伊東の近藤聰子さんを誘つて川井森さんも出席、今井、坂倉、村井女史もかけつけて、東京の女流どころ一堂に集り、なごやかな裡に種々懇談の後一泊して、翌朝解散した。六月二十七日 山岳會ルーム二階で婦人のつどいを催した。當夜は村井、川森兩女史を圍ん

★富山支部便り

使用禁止で少からず我々を驚かしていた黒部軌道もどうやら多少の施設改善を行い營業線として復活するらしい見通がつき七月初めには間に合いそうである。

今年の立山方面山小倉料金は
立山温泉 四〇〇圓
劍澤、劍ヶ御前小倉、黒部平、五色小倉 三七〇圓
一ノ越、地獄谷、室堂、天狗追分、弘法 三五〇圓
稱名小倉 二七〇圓

★マナスルウ登山隊基金

會員をはじめ岳人關係各位の御協力により四十萬二千五百圓に達しましたが目標の六〇萬圓に未だ遠く更に一層の御援助を御願ひ致します。尚御送金は振替口座東京四八二九番を御利用下さい。

芳名録(五月卅日現在)

前回追加分 計八二、五〇〇圓
▲千圓 桑本澄 小熊信一郎 成蹊大學山岳部(第二回)
▲三千圓 山梨交通株式會社 足立吉朗
▲二千五百圓 若林啓之助 白鳳會 國鐵小倉工場山岳部

▲二千圓 早川義郎 戸田英夫

龜田與三 石黒清藏 喜多要

慈恵大學山岳部 矢田城太郎

山崎公平 大國信 村上勝太郎

昭和電工大町工場山岳部 江口重幸 今西寿雄 磯野計藏 大町山岳博物館 福島一馬

▲壹千圓 竹澤長衛 慶應義塾山岳部 橋本三八 川喜田壯太郎

和田清助 永井進 太田喜作

今中恒雄 津峠の會 北飛山岳會 佐藤金一 山田和雄 山口國俊 藤島敏男 岩永信雄 川森左智子 木原均 三枝守博 山毛輝會

▲五百圓 吉見和夫 戸畑山岳會 東洋陶器山岳部 岳人社 荻原肇 加賀美むつみ 石川久雄

榮和高校山岳部 ユングフロウ 泉尾忠志 身延高校山岳部 日本ゴム山岳部 久留米山岳會

愛媛山の會 川喜田貞久 川喜田冬二 谷本悦四郎 橋恒雄

平松傳 山村淺次郎 波多野光雄 春日邦平 北辰雄 植村辰次郎 田部重治 菅原金藏 泉州山岳會 河野之彌

▲現品 ブドウ酒(一萬二千圓) 今井友之助 瑪瑙セット(一萬六千圓) 百瀬舜太郎

尚マナスルウ地圖の賣上金千圓が追加されました。

退任された役員

昨年度で任期満了となり退任された左記諸氏の献身的な會への御寄與に對し本會として衷心より感謝の意を表します。

評議員 藤島敏男 西堀栄三郎

伊藤秀五郎 辻莊一 監事 中屋健次 理事 織内信彦 伊藤恩



二峯登頂という世紀の偉業をうちたてたハント隊長とヒラリーがナイトの稱號を授けられた

度で最高ともいふべき敬意と歡迎を受けたようだ。フランスは英國隊をシャモニーに招待すると發表しているし、英國もテンシンをロンドンに招いた。

エヴェレストの登頂ということはこのくらしい文化史的意義をもつてゐることではあるが、登山とか探險に對するその國民や爲政者の認識の深さ、知性の高さを羨ましく思わざるを得ない。

古くはアルプスにおける横さんの偉業、アルパータに残した足跡近いところでは早大のアコンシグア登頂、そして今度歸つてくるマナバルウの遠征隊。われわれ自分の國のことを考えるとちよつと淋しい氣持がする。

どうせ貧しい國なんだから別に勲章や年金を欲しいなどとは望まぬが、日本の政治家とか實業家とかの間にせめて登山とか遠征に對するより大きな開眼が……と期待せざるを得ない。

(H)

第八回國體 登山の構想

金坂 一郎

山登りはもと反動的なものである。文明開化の世の中に逆行し、たゞ脚力だけを資本として、人気がない所をテジ／＼と歩く。がこれは單なる野蠻行爲ではない。それが證據には、非文化的と稱される社會には、レジリエーションとしての山登りは發達しない。既に文化が存在するということを前提の野蠻行爲であり、或いは言葉を変えていえば、原始へのノスタルジアが一つのレジリエーションの形をとつたものである。

山登りがかく求心的、回顧的なものであるならば、登山家は單純、素朴な形態の山登りを、人氣のない原始的な山々に行き、それ能うべくんば、たつた一人の山旅を楽しむを以て良しとする。それが近頃は極地法とか稱して保安隊員向けの集團的行動をとる者あり、又國體登山と稱して御苦勞にも全國から山登りの好きな連中をかき集め、ゾロ／＼と山狭しとならんで歩かせる。これは如何なる譯か。

と、ひらきなおつた疑問が提出される譯であるが、これは何も難しく考へる必要はないので、人間というものは生きてゐる以上、進歩、發展を願うように出来てゐるからである。たつた一人で荒々しむき出しの原始を追求しようとも、そこには自ら行爲自體の進歩、發展が行われ、それが高い所

に向つてはヒマラヤ登山として現れ、廣い方面に向つては國體登山という形態をとる。たゞそれだけのことである。

しかも人間というものには有難いことには機械ではない。進歩的と稱する、耳には聞えは良いけれども、進歩を旗印に一直線を邁進するのは半ば機械である。左に行き過ぎ、はねかえされては右傾する。右の壁にぶつかれば左の方によるけて行く。かく辯證法的發展を遂げて行くのが人間の行爲であるならば、人は求心力と同時に遠心力をも持たなければならず、遠心力と求心力とのバランスにおいて無事ことが運ばれるのである。

ここで尚注意しなければならぬいもう一つの點は、人はたつた一つの身體を持ちながら、同時に右へ進みながら、且つ左へ進むことも出来るのです。日本山岳會が、戦前からの mountaineers のためのクラブの形を持ちながら、且つマナスルゥに登山隊を派遣し、或いは國民體育大會の山登りを運営するのもそれだ。

前おきが少々長過ぎたが、とも角國體登山の意義と稱するものは右のような根據に立脚するものである。これは多分に遠心的傾向の現れであるが、遠心力は求心力あつての遠心力で、國體如き大風呂敷的行事も、クラブとしてのJACの支援あつて始めて遂行し得るのであつて、この點は會の長老諸氏以下にお含みおき願ひしたい點であるが、國民體育大會は

御承知の通り日本のスポーツのレベルを示すものである。従つて選手諸君はこの日本の水準（實は世界的水準といつても良いのだが）を誇つていいし、又誇りとしなければならぬ。ところが從來一番すみずみにおとなしくしているかの如き感のあつたのが選手諸君。これは改められねばならぬ。審判員たる技術役員や、マネージャーである監督や、或いはオーブン視察團が主役であるのではない。國體登山の主役はあくまでも選手である。このことをはつきりさせるというのが今年の國體の眼目の第一である。

しかし選手に大きな顔をしるというても、大きな顔が出来ないような選手では、如何ともないがたい。いや、大きな顔が出来ないような甘い選手を故意に集めようとしたと疑われても良い所がなきにしもあらず。こんな所に過去の國體運営上の大きな缺陷がひそんでいたとも云えよう。

これについて一つ嬉しい話がある。それはある有力な遠征隊員についての話だが、遠征計畫を目前に控えながら、昨年の國體豫選において選手たらんと立候補し、幸か不幸か豫選に洩れ、且つ今年も歸朝後の多忙な體をひッさげて豫選に立候補されるのである。一身上のことにわたつて恐縮であるが、實は私も昨年あたりから、選手として立候補することを夢みていた譯だが、不幸にも役員を命ぜられた夢は未だに實現しない。どうぞ我と思ふ方々は、日本の水準を示すだけの意味でもいかに、選手として立候補して下さい

残雪の大無間・小無間

一 佐藤 佳年

三月二〇日 雨

千頭七〇〇（林鐵材木積用空車便乗）千頭ダム

一、〇〇〇—二、〇〇〇朝日岳方面との分岐點

一三、〇〇—三、二〇〇舊道の十字路一四、〇〇アケビ澤上

部一五、〇〇大タル澤小屋一五、四〇

三月二一日 快晴

大タル澤小屋七、一五△一六八八下鞍部八、一〇△一八八三手前のガレ場一〇、四五△一八四〇の地點一二、五二△三隅池畔一七、〇〇（幕營）

三月二二日 晴後曇

三隅池八、四五 廣尾根一二、〇〇大無間頂上一四、一〇—一四、三〇カラ松谷一五、一二小無間手前の鞍部一六、三〇（幕營）

三月二三日 曇雪雨

宿營地六、〇〇小無間南西ガレ六、三〇小無間頂上七、〇〇第二ビージ七、五〇田代九、五〇ビージ八、五〇田代九、五〇

われ／＼この山行は、早春の南アの雄峰をその前衛山岳から心ゆくまで展望し、でき得ればこれをカメラに収めることにあつた。

このコースは案内書などに一日行程になつてゐるものもあるが、季節や、撮影のための道草や天候等を考慮に入れ二—三日行程とし途中野營をも決定した。果して最初の日は雨で大タル澤小屋泊り。道

路の分岐點が定かならぬことや、積雪で道を失うことは兩三度ではすまなかつた。指導標が全然見當らないことや、時折道が地圖と違つてゐたこともあつたが、速度を緩ませた最大のもは深雪とブツシュの競合であつた。

三方窪では膝を没する程度であつたが登高するに従つて深さを増し、三隅池を過ぎ大無間に取付くあたりから胸をも没する状態になつた。用意の輪カンジキは一度踏込んだら足が抜けかけたので全然用をなさない。更に困つたことはそうした地帯に足の踏場のない位ブツシュが密生してゐたり、胸をつく急勾配が迫つたりすることであつた。こんなわけで三隅池大無間頂上間一時間半位といわれたい間も五時間餘を要した。大無間を下り小無間に上る道もほぼ同様の状況であつた。これがまた小無間下鞍部でテント宿營を餘儀なくした。小無間山から田代までの道はだん／＼と雪も少なくなりブツシュも左程ではないので順調。田代で西映林業會社の瀧浪氏の話によると地圖を見誤り第三ビージと第四ビージとの鞍部が第三折し外山澤右股に出る事例が時々あるとの話。裝備がよければ下るには下れるが田代に着く時間は大分遅れるとのことであつた。

この行程は時節が苦しさもあつたが楽しさははるかにこれを越えた。早春の雨の寸又溪谷の美しさもまた格別なものであつた。春の芽生えは未だしどあつたが、點々と眼に寫るマンサツ（？）の薄黄色の花がかすかに春の息吹を感じしめた。（三、二六）

い。過去からのつながりや、又全
體のバランスというような見地か
ら、今年も隔靴搔痒感の豫選が行
われるかも知れないが、少くとも
一年々々と選手の質が向上して行
つてほしいものである。

以上のような見地から考えれば
オーストリア視察團というものは、將
來における國體運営担当者、の参
考、又は過去における國體運営者
の自己批判という以外には、餘り
大きな意味はない。本年の國體登
山は、先ず脱皮の第一歩として選
手中心主義を振りかざす以上、オ
ーストリア参加者は右の範圍の視察
團、及び選手に學ばんとする眞面
目な見學團に限り、その参加條件
として、各縣等の豫選に参加し、
且つ豫選責任者の推薦あること、
とした方針も自ら了解して頂ける
ことと信ずる。

技術役員は審判員に過ぎないと
いうことを書いたが、實は山登り
には専門化された審判員はない。
従つて審判員は、實験的経験ある
登山家で、又批判力の十分ある人
の中から選ばなければならない。
實際の所、過去の國體登山に
おける實質上の選手存在は、選
手ではなく、むしろ技術役員であ
つた。この點本年度は、選手らし
い選手が現れて來て呉れることと
信ずるものであるが、これに對し
て、技術役員も若い活氣ある年齢
層から採用し、講評したり、指導
したりするだけではなく、むしろ
選手とともに切磋琢磨するまでに
持つて行きたいものです。

過去においては、技術役員は大
學山岳部のチーフ・リーダー級の
中から選ばれ、それらの所屬に
おける古狸級の存在でなければつ
とまらないような印象を與えた。
いざという時を心配すれば、かゝ
る老練的の選擇方針は止むを得な
いように考えられるが、選手と技
術役員とが切磋琢磨するというな
らば、思い切つて若い役員をも採
用すべきで、選手と役員とがマツ
チしなければならぬと考えたら右
の方針も承認して頂けるかと思
う。尚技術役員長の講評は、一應の
しめくくりをつくるための御挨拶
みたいなもので、それらの選手
にとつて必要なことは、むしろ全
期間中を通じて、機に應じて受け
る指導や注意であり、これはその
時ばかりのことと聞き流さず、そ
れらのお土産として將來の山行
に是非生かして頂きたい。

女流登山者の問題は、今までな
おざりにされていた嫌いがある。
これはもつての外で、若い男のアル
ピニズム教育あたりを第一にお
くのは、本末を転倒せるものとい
うべく、母親が山登りを正當に認
識して始めて、子供が筋の通つた
山登りに進み得るので（尤も、無
理解の中にいじめ抜かれた擧句
に、本物の背骨が出来上るとい
うのも一つの事實ではあるが）い
づれが重しとなすことは出来ない筈
この點過去における女流登山界
は健全であつたとは申し難い。
いや、男の山登りは絶対量からい
え、それに増して不純なものを含
むが、少くとも女流登山家にし
て長続きするものがまことに少
く、従つて先輩から後輩へのつな

がりも殆どなかつたということだ
けはいえると思う。
國體は、このような問題を眞剣
にとり上げるのについて、まことに
良きキツカを提供する。各縣
等の豫選責任者をお願いしたい最
後のことは、今年に思い切つて女
性のために廣い席をあけて頂きた
いことである。

最後に技術の問題について若干
言及しよう。岩登りやスノウ・ク
ラフトばかりが登山術ではない、
と此所まではキツパリといえる人
は相當にあるが、では山登りにお
いて最も大切なことは何か、と問
われて、直ちにそれは「歩くこと」
だ、と答えられる人は餘りにも少
い。これは登山家と稱する連中の
大部分が山登りをつきつめて考え
たことのない證據である。「歩くこ
と」にもピンからキリまである。
例えば岩場通過における重心の移
動法や、堅雪上の歩行における腰
の入れ方とか或いは、リズムを保
ちながら、樂に早く歩くというよ
うな狭義の歩行術から、足場の見
方、ルートを選び方、或は又、自
分一人だけの問題ではなく、仲間
をも確實に歩かせる方法等廣義の
歩き方に至るまで、まことに廣範
圍にわたる技術ではあるがこれ要
するに登山術の根本問題である。
岩を登らせたら連者な人がある
それでいて一度悪場て失敗して登
路を引きかえすとなると、登つた
ときよりも尚一層「歩く」する連
中がある。これは歩き方を満足に
覚えないうちに、岩登り術に熟練
し過ぎた結果である。このような
登山家は決して長続きしない。こ
の點が選手諸君に、國體出場前に
再検討しておいて頂きたい問題の
重點である。

モリー・エルゾグ著
近藤 藤 等 譯

處女峰アンナブルナ

人類最初の八千米登頂
B 6 版三五〇頁 寫眞二
八葉 三四〇圖 白水社

一九五〇年のモンスーン期の直
前に敢行されたフランス隊のアン
ナブルナ攻撃は、劇的な成功を収
めて、人類がその頂に立つた最初
の八千米峰であつた。たつた一回
の遠征で、何らの偵察もなしに、
ヒマラヤの巨峯に登頂できたとい
うことは未曾有のことであつた。
しかしこの遠征隊がアンナブルナ
から受けた復讐は、あたかも長い
間處女峰であつたマッターホルン
がウィンバーの勝利に對して加え
た復讐にも似た慘酷なものだと思
われる。しかもこの隊はエルゾグ
隊長以下一人の命も失わずに歸
還した。その生還は、むしろ登頂
以上強い精神を必要とするもの
であつた。讀む方が眼をおゝいた
くなるほどの凄惨さである。

この書は病院でエルゾグが六
ヵ月かかつて口述したものを基礎
に、彼の弟が援助して出来上つた
ものである。一九五一年に原本が
パリで出版され、五二年十一月に
はイギリスで英譯本が出て、つづ
いて米國版となり今は十數ヶ國
語に譯されていゝといふ。イメリ
スでもすでに五版を重ね、アメリ
カでは本年三月以來ベストセラー
ズの首位を占めて最近にまで及ん
だ。山岳書がこのような反響を呼
んだというのは稀有のことだろう
と思われる。登頂までのサスペン
スも大したものだが、退却時の異

常な経験が、ここでは一つの人間
記録とまでなつていゝところに、
この書が一般に愛讀される理由が
あるのだと考へる。おそらくこれ
もがエルゾグという人物を好き
になるだろうと思はれる。

この書が正式に版權を得るのに
七ヵ月を費して、出版されたこと
は、日本の山岳界のみならず一般
讀者にとつて喜ぶべきことであ
る。とかく版權無視の傾向が強
く、寫眞の版權などあつてなきが
如くに取扱われている今日、正式
の譯者が著者の努力によつて完
成したことは何よりである。この書
のためにエルゾグが贈つた巻頭
の肖像は印象的である。昨夏マ
ッターホルンの登攀を終えた後の撮
影で、不自由な手を見せながら
も、彼の不屈の意志を物語るもの
があつて、賑々たる生氣を添えて
いる。まだ翻譯の勞作を讀了して
いないが、廣く一讀をすすめた
本なので、ともかく、この會報上
に紹介した次第である。(T・S)

茂木慎雄著

キャンピングとハイキング

ポケット版 二一五頁
創元社 二〇〇圓

純粹に自然の間に、人間本來の
姿を求め人が相對的に少くなり
つゝ要望、特にキャンピング界の清淨
化が要望されている今日、斯界の
先輩たる氏が、その本質から説き
起し讀者に呼びかけるが如き口調
で詩的な情趣を湛えつゝその豊富
な體驗を基調として、長らく國鐵
に在職され一般者の相談相手とし
ての體驗から出たものだけに、在
來の案内解説書を抜いている(F)

清水谷皆香園

時代を偲ぶ會

近頃の日本山岳會の様々な催しに古い會員の方々の御出席が多くなつて來た傾向は誠に喜ばしい。斯んな事が今度の動機とでもなつたのか、やがて五拾年にもならんとする日本山岳會の歴史の中でも最も意義ある清水谷時代を偲ぶ會をやろうじやないかという話が最近急速に持上り、去る六月十四日、駒込の六義園でこの會を催した處、在京の名譽會員は全部御出席という實に近來にない豪華版の集りであつた。

その昔、江戸時代柳澤吉保の邸宅であつたという菓茸の茶室に、名譽會員の長老を圍んで折からの新緑を眺めてゐると、或は秩父の山々の新緑の頃の旅を思い出し、或は明治、大正の頃の「山岳」を今一度繰り見て見たい様な氣になつたのもあながち私一人では無かつたらうと思ふ。

戦後の混亂時代に直面して、その存續をさへ危まれたこの傳統ある日本山岳會を今日ヒマラヤに迄遠征隊を送り出せる様に確立してくれた若い會員の會に對する愛着と努力の結實で、實は今日、名譽會員全部の御出席を願つて創設時代の話に一夕を楽しんでいただけの様になつた事は日本山岳會ならでは味わえぬ空氣ではないだらうか。

老いも若きも共に、心ひそかに求めていたものを久方振りに求め

得られたというのが當日のいつわらざる空氣であつた様に私には感じられた。出席者は左の二十七名
(成瀬記)

名譽會員

高野鷹藏 鳥山梯成 武田久吉
田部重治 中村清太郎 近藤茂吉
冠松次郎 別宮貞俊 日高信六郎
松方三郎 沼井鐵太郎 岩永信雄
神谷 恭 初見一雄 渡邊公平
島田 巽 田邊主計 交野武一
藤井運平 村井米子 望月達夫
沼倉寛二郎 金坂一郎 野口末延
吉田久兵衛 網藏志朗 古澤 肇
成瀬岩雄

山岳 第四八年

内容豫告

- マナスルウ 今西 錦司
 - 冬の知床半島の山々 京大山岳部
 - 木曾御岳、赤川谷と傳上川 新井 清
 - ツエルマツトのグラブルーム 成瀬 岩雄
 - セガンチニの跡を訪ねて 津田 正夫
 - ヒマラヤ遠征と英國の人々 島田 巽
 - 確 保 論 金坂 一郎
 - (追憶) 秩父宮殿下(横・松方)
 - スイス隊のエヴェレスト(田中榮藏)
 - A5版約一八〇頁 寫眞三〇葉
 - 地図數葉
- 以上の内容をもつて編集を了し組版に着手、七月末刊行の豫定

早大アコンカゲア

遠征隊歡迎會

五月二十九日午後六時、於三井別館Fホール

すでに報告會の行われた後なので、四角ばらずに村井早大山岳部長、關根隊長、淺山、日下田、塚本、今村各隊員ら主賓にそれぞれのアコンカゲに座つていただいたて歡談。ア峰はすでに人間の登頂を許した山だとしても日本の登山界に於ては最初の七千米の征服である。ヒマラヤ八千米の山頂を目ざして戦前からたゆまざる精進をつづけて來られた關根君達であつたからそここの成果は得られたものであり、おそろくこの試みはさらに高度の登山目標の前提として爲されたものである。對日感情の良好な亞國であり又大統領自ら登山に理解を持たれているという好條件があつたにせよ好意を持つて派遣協力された亞國山岳部隊に終始つきまとわれた事は可なり迷惑であつたらしい。だが亞國に於けるア峰の今までの登山が遙かに低いペースキャンプから一舉に日歸りで登頂する方法を採つていたので、關根君達の登頂以來これをまねたという事は愉快である。此會は通知がおくれた爲に參會者が少なかった。集會擔當者として深くお詫びする。出席者廿五名(交野記)

會務報告

小集會記事

第一五二回 五月廿一日(木)

講演 アコンカゲ遠征報告
講師 關根吉郎氏
アコンカゲの登頂に成功した早大遠征隊の詳細な行動報告の後で、裝備、高度馴化、ア國山岳界の事情等に關する質疑應答があり、同隊撮影のスライドを映寫して散會。ルームからはみ出るほど參會者多く入口で引返した人も多かつた點お詫びする。

役員會

二月 役員總會(廿七日)

理事 松方・成瀬・高木・杉本・沼倉・林、評議員 沼井・神谷

議事 本年度役員選出の件

本年度理事として左記の人々を推薦する旨成瀬理事より提案あり
成瀬・交野・渡邊(△)・藤井・望月・村山・村木・金坂・山田・舟橋・沼倉・加藤(泰)・杉本・大塚今村

三月 役員總會(廿五日)

理事 成瀬・堀田・望月・沼倉・杉本・林・渡邊 評議員 沼井・神谷 監事 石原

議事

一、新年度役員の件
成瀬・交野・渡邊の三理事を中心として會務を遂行することとし今年度より會計擔當理事を常務理事に加えることとする。

二、昭和二十八年年度豫算の件

成瀬理事に豫算案の編成を依頼

三、會員總會上程議事の件

四、定款一部變更の件 成瀬理事

新年度より副會長を設けて會長を輔佐することとし、來る會員總會に諮ることとする。

五、圖書室留守番の件 林理事

至急適任者を求めることとする
六、第九回國體の件 林理事
開催時期並に受入態勢に多くの問題あり、近く林理事渡邊に際し之が解決を圖る旨説明あり。

七、八幡製鐵富士合宿リーダー派遣の件 林理事

四月下旬に右合宿を行うにつき指導員派遣の依頼あり、適任者を選考派遣に努力することとする。

八、本年度會計報告 沼倉理事

廿七年度末に於て赤字合計一五萬圓になり次年度に繰越すの止むなき事情説明あり、次年度に於て之が解決補填を圖ることとする。

九、廿八年度「山岳」の内容豫定報告 望月理事

五月 役員總會(十三日)

榎會長 理事 成瀬・沼倉・渡邊
交野・藤井・杉本・金坂・大塚

望月・今村 評議員 神谷・沼井・島田 監事 石原・林(外)

に金光氏第九回國體關係)

議事

一、第九回國體登山の件 林理事、金光

坂本旭川市長を主として組織された準備委員會の外に新たに札幌・小樽・旭川の有力岳人にて實行委員會を組織し本部との連絡に緊密にし具體的に準備を計ることになつた旨金光氏より説明あり。同時に大雪山案を検討の上決定す。

二、昭和廿八年度役員事務分擔の件

總務 成瀬

庶務 交野・會計 沼倉・渉外

成瀬・支那 交野

事業 渡邊

國體 渡邊・加藤(泰)、藤井・

加賀のモンブラン

週末だの祭日だのそんなものとは無関係に休んで、白山に登ってきた。七月一日朝金澤で兩人落合、十何年ぶりの深田久彌君に久淵を紋し、その夜は山麓市ノ瀬泊二日砂防新道を室堂に到る。彌陀ヶ原から頂上を望む風景はよい。少し早かったが、花も弗々咲いている。三日風雨をついて山頂に至る。眺望皆無、やむを得ない。東面の豊富な雪田雪溪を踏み、美しいブナの自然林を大川温泉にでる。宿もまだ至つて閑散、素朴な環境大いに気に入る。四日夜來の豪雨で川は大増水、途中の澤渡れぬと言われ、終日水嵩の減るを眺め暮す。

五日白水瀧の壯觀を賞し途中の澤もことなく渡り、白川街道に出る。御母衣の有名な遠山家は「參觀拒絶」の立札に、さもありなんと遠慮し、白鳥までバス、庄川の流は美しい、汽車電車と乗りついで岐阜に泊る。

こんな山旅だったが、北アルプスから眺めて、いつかはと思つていた白山に登り、深い林、閑寂な山村を幾日か歩いて、心に残るものがあつた。(川喜田壯太郎・藤島敏男)

集會 交野、村井(米)・學生
大塚、村木、金坂、舟橋 山田
調査研究 今村
出版 望月
山岳 望月・山日記 林、村山・
會報 渡邊
圖書室 松方、島田
體協關係 林、入澤

三、常務理事選出の件
成瀬・沼倉・渡邊・交野に決定
四、昭和廿八年度評議員推薦の件
左記の通り推薦に決定
神谷・日高・沼井・松方・岩永
別宮・三田・今西・津田・伊藤
(秀)・島田・堀田、山崎(春)・谷
口・村井(米)・篠田・西堀(任期
未了)及び各支部長在職者
五、定款改正委員の件
沼井評議員・成瀬・望月・沼倉
各理事に委嘱することとする。

六、第八回國體事務の一部を關西
支部に委嘱の件決定
七、早大アコンカグア遠征隊歡迎
會開催の件五月二十七日に決定
八、沼井評議員より役員會務處
理について左記提案一同諒承す
る。

本會の役員は會員の代議並に事
務委任機關として選出されたもの
であるから役員會の決議及び報告
を尊重し責任を以て會務處理に當
ること。

九、體協本部より日本體育協會史
編纂に際し本會に對し登山部門
執筆の依頼あり、右擔當者とし
て沼井評議員を推すことに決定

臨時役員總會

六月二十九日(月)

議事
一、本年九月京都大學 AACK 山

岳會のアンナブルナ第四峰登攀
計畫に當り、本會の後援を依頼
されたにつき、右受諾、可否
の件

右は隊員藤平氏の一應の説明あり、若干の質疑應答の後本會としても一應三田隊長の歸京を待ち現地の事情を聴取の上、本會の來年のマナスルウ再舉ともならみ合せて後、京大に對して回答をなす旨衆議一決す。

一、マナスルウ隊の登山報告書の編集に關する件
右は委員を設けて毎日新聞社と協調して編集に當る事とし、委員として左の五名を決定す。
沼井鐵太郎。田邊主計。成瀬岩雄。渡邊公平。望月達夫。

★ハント隊長から

の返信

六月廿四日外務省情報文化局長より別紙書狀寫同封ニ峰隊長ハント氏からのメッセーヂの傳達があつた。

昭和廿八年六月十八日
特命全權大使 西山 勉
外務大臣 岡崎勝男殿

エヴェレスト探險隊長ハント大佐より、イギリス高等事務官事務所を通じ、日本山岳會あて左記のメッセーヂの傳達方依頼越の次第があつたから、右よろしくお取計いお願申し上げる。

“Warmest Thanks for generous congratulations and send fraternal wishes Manaslu Expedition for success, J. Hunt.”

★新着圖書

・Harvard Mountaineering No. 11 (May 1953)——ハーバード山岳會の機關誌、A5 版總アット紙七二頁一九五二年のマツキンレイ遠征と同年のアンダス遠征が主な記録のようだ。寫眞二七葉。

・Appalachia, 1926 (創立五十周年記念號)——アメリカでも古い歴史をもつて在ボストンアパラチアの山岳會の會誌で新刊ではない。中に機會長らのアルバータの記事と寫眞が載つているから、日本山岳會のライブラリに在つた方がよろうとて、マザマのアイレス氏が態々送つてくれたもの。アルバータの記事は後に米國山岳會々長に推された H・バルマー氏が四頁に亘つて書いている。(M)

戦後はじめての

會員名簿 新刊

會の財政が窮乏のため會員名簿も購入を願つております。御希望の向きは賣り切れぬ中に事務所に御求め下さい。體裁戰前と同じ。一部百圓

昭和廿八年七月廿三日發行

東京都千代田區
神田駿河臺四ノ六
發行所 法人 山本山岳會
編纂者 渡邊 公平

日本體育協會

電話 神田 五一一一一五

振替口座東京 四八二九番

東京都港區赤坂堀江五番地
印刷所 株式會社 技報堂